

大塚城跡
発掘調査報告書

1990年

山形県
山形県教育委員会

おお つか じょう
大 塚 城 跡
発掘調査報告書

平成2年3月

山 形 県
山形県教育委員会

序

本報告書は、山形県教育委員会が山形県土木部の委託を受けて、平成元年度に実施した一般県道大塚米沢線道路改良事業（大塚地区）にかかる「大塚城跡」の緊急発掘調査の成果をまとめたものです。

大塚城跡は、室町から安土桃山時代に築かれ伊達家に仕えた大塚伯耆守高頼の居館であったことが知られ、16世紀末（大正年間）には置賜地方から伊達氏の移封に従って廃城となったといわれています。今回の調査は、城の外郭を取り囲む家臣団の牛谷氏と平氏の館跡で、建物跡・土坑・井戸跡・溝跡・土壘・堀跡などの遺構や、青磁など中世から近世までの陶磁器の器など遺物が出土しました。また、調査区の東は廃城となったおり、現在は川西町指定文化財となる旧大塚城門扉（牛谷家門）が移築されたと伝えられ、戦国の世から今日まで風雪に堪忍んだ歴史の重さを感じられるところです。

これらの文化遺産は、私達の祖先が語りかけてくれる掛替の無い歴史の証言者でもあり、この遺産を保護し未来に継承することは、私達の大切な責務といえます。

近年、県民福祉や経済の向上を目的とする開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財との関わりも増加の一途にあります。これらの中には、今なお多くの問題が山積していることは、現実問題として大きな課題を与えられていることになります。山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」という立場から、一つずつ問題を解決し、今後も埋蔵文化財の保護と活用のため努力を続けていく所存です。

終わりに、本調査に御協力をいただきました山形県土木部道路建設課・米沢建設事務所・東南置賜教育事務所・川西町教育委員会・川西町大塚地区・小松地区および地元の方々に記して感謝申しあげるとともに、本書が埋蔵文化財に対する理解を深め、その保護や普及の一助となれば幸いです。

平成2年3月

山形県教育委員会
教育長 木場 清耕

例　　言

1 本報告書は、山形県教育委員会が山形県土木部の委託を受け、平成元年度に実施した「一般県道大塚米沢線道路改良工事」に係る「大塚城跡」の緊急発掘調査報告書である。

2 本遺跡の所在地・調査期間・調査体制等は下記の通りである。

遺　　跡　名　大塚城跡（山形県遺跡地図番号新規）

所　　在　地　山形県東置賜郡川西町大字大塚字町拾武1529他

現　　地　調　査　平成元年6月19日～平成元年6月30日（延べ10日間）

調　　査　主　体　山形県教育委員会

調　　査　担　当　山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者　主任調査員　佐々木洋治

　　　　　同　上　佐藤　正俊

現　　場　主　任　黒坂　雅人

事　　務　局　事　務　局　長　土門　紹徳

　　　　　同　補　佐　斎藤　久子

事　　務　局　員　新関　絃子・長谷川　浩・高橋　春雄・永井　健郎

3 本報告書に収録した遺産の縮尺は1/200・1/40で掲載し、遺物は1/3・1/2とし、各々にスケールを付した。

4 掘図及び文章中で使用した略記号は下記の通りである。

SB……建物跡　SE……井戸跡　SD……溝跡　SK……土壤

5 遺構平面図中の方位は真北を表す。またグリッドの南北軸はN—25°—Wである。

6 本報告書の作成は黒坂雅人が担当し、本文はIを佐藤正俊が、II～Vを黒坂が各々分担執筆した。また掘図・図版の作成に当っては、沢田恵美子、渡部由美子、加藤美佐子、佐藤恵美子がこれを補佐した。

7 本書の編集は安部実・黒坂雅人が担当し、全体については佐々木洋治が総括した。

8 本書の作成に当って、牛谷佑二氏より貴重な資料を提供いただいた。また渋谷敏己、藤田宥宣の各氏より御助言、御指導を賜った。末尾ながら銘記して御礼申し上げる。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	2
III 調査の経過	4
IV 調査の成果	4
1 基本層序	4
2 遺構	4
3 遺物	9
V 調査のまとめ	10

挿図目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 大塚城縄張図	2
第3図 林崎館之図	3
第4図 遺跡概要図	5
第5図 遺構配置図	7・8
第6図 SE 2・SE 3 井戸跡	7
第7図 平氏館土壘土層断面図	7・8
第8図 出土遺物（1）	9
第9図 出土遺物（2）	10

図版目次

図版 1 大塚城跡遠景・大塚城跡土壘・牛谷館遠景・牛谷館近景	
図版 2 牛谷家長屋門・伝旧大塚城門扉・牛谷家略絵図	
図版 3 調査区全景・作業状況・遺構検出状況・SD 1 検出状況・SD 1 精査状況他	
図版 4 SE 2 検出状況・SE 3 検出状況・SE 2 土層断面・SE 3 土層断面他	
図版 5 出土遺物	
図版 6 平氏館近景・平氏館土壘・平氏館出土遺物・平氏館土壘土層断面	

I 調査に至る経過

大塚城跡は、当初縄文時代の集落跡として山形県遺跡地図（1987年）に登録されている。その後地元の渋谷敏己氏の努力により大塚城の内郭の位置が特定され（1981年）、さらに昭和64年からは文化庁国庫補助事業により県内の中世城館跡調査が始まり、大塚城跡の内郭や外郭調査が実施されて、城郭の全体構造が明確になってきた。（註）

平成元年に一般県道大塚米沢線道路改良工事が着工されることになり、大塚城の南西側外郭に位置する牛谷館の内部と平氏館の土壘の一部が事業にかかる可能性が出てきたため、山形県教育委員会では山形県土木部から依頼を受け、平成元年5月15・16日に試掘調査を含む遺跡詳細分布調査を実施した。結果は、とくに牛谷館から中国明代の青磁や掘立柱穴などが検出された。それを基に、県教育委員会は県土木部道路建設課・米沢建設事務所と協議を重ね、川西町教育委員会の協力を得て、牛谷館を中心に工事に先立って記録保存のための緊急発掘調査を実施することになった。調査は県教育委員会が山形県埋蔵文化財緊急調査団に調査を委託して、平成元年6月19日から6月30日まで発掘調査を実施した。

（註）大原城跡の内郭や外郭などの全体的な構造は、中世城館跡調査でその内容などをま

とめており、詳細な資料は紙面の都合もあり本書から割合した。

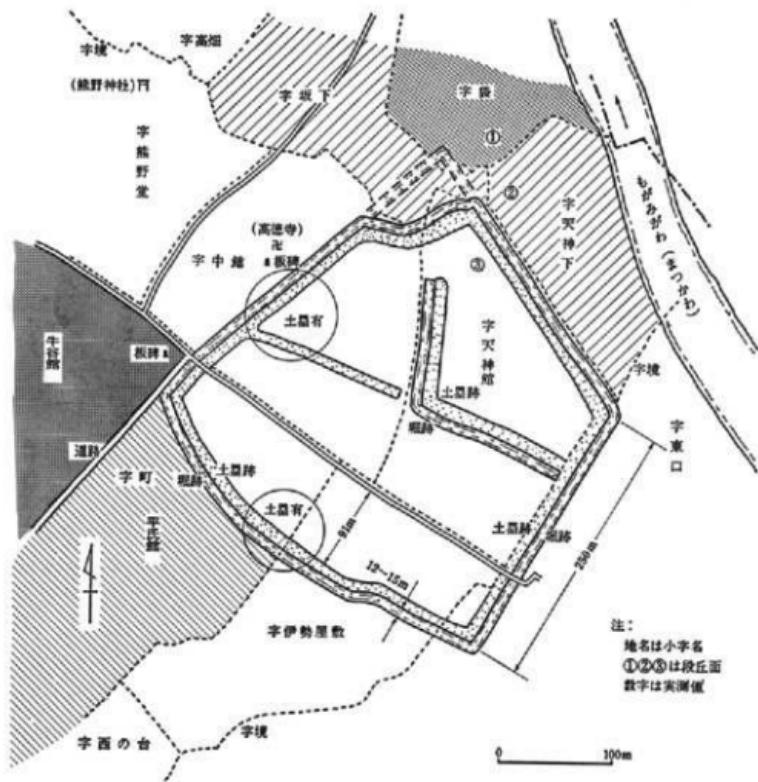


第1図 遺跡位置図 (S=1:25000)

II 遺跡の立地と環境

大塚城跡は川西町の北縁、JR米坂線犬川駅の北東約2.8kmに位置し、北を最上川、南から東を犬川、西を眺山丘陵に囲まれた河岸段丘に立地する。戦略的には長井盆地の出口をおさえ、梨郷・宮内方面、所謂北条郷をうかがう重要な地点といえる。現在付近は一面の水田地帯であるが、城域は微高地になっており、一部開田されたものの畠地、宅地として利用されている。標高200m前後をはかる。

大塚城がいつ頃築かれたのかは不明であるが、天明年間（1781～1789）に伊達藩主の人が



(米沢商業高等学校社会科学部原図) 明治15年・同26年東置賜郡大塚村大字大塚部分圖を基に作製。

第2図 大塚城縄張図(日本城郭大系3 PP161より補筆・転載)

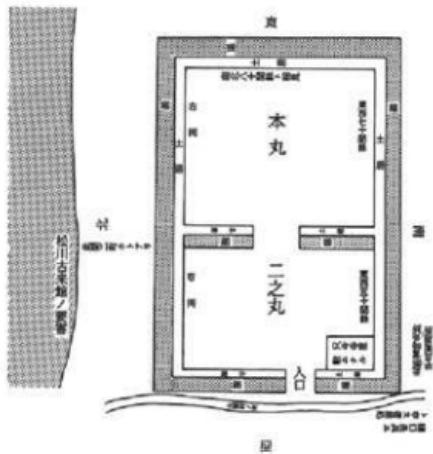
事取扱の基本台帳として編さんされた「伊達世臣家譜」によれば、鎌倉時代には大塚因幡守親行（左衛門尉）が「置賜郡長井荘大塚城」に住し、その十四代の子孫に左衛門佐宗頼がおり、その子摂津守道頼、孫伯耆守高頼が伊達政宗に仕えたことが知られる。その間の大塚氏の事績については殆ど知られていないが、伊達晴宗の時代に大塚将監が大塚下総守の名跡を相続し林崎館めぐりの所領安堵を受けた旨の証文が伝えられている（川西町1979）。この林崎館については享保年間（1716～1735）に描かれた絵図が岩瀬家文書にあるが（第3図）、松川（最上川）との位置関係等から現在の大塚城とする見方もある。また、大塚下総守、将監、宗頼の関係は不詳である。その後天正19年（1591）、伊達氏が岩手山に移封されると道頼父子もこれに従い、宗頼は大塚城を廃城して帰農し、その地を攝族牛谷氏に与えたといわれている。

大塚城跡には現在も高さ2m程の土壙と堀跡とみられる低地が一部残存する。それらや縄張図（第2図）などから推測される外郭まで含めた城域は500m四方に及ぶ広大なものであったと考えられる。

今回緊急発掘調査を実施した牛谷館は、大塚城西側の外郭部分にあたる。牛谷氏はもと越後國牛谷村に住し、牛谷姓を名乗った城小太郎資顕を祖先とすると伝えられ、大塚城廃城の時には松森の菅原氏館に居住していたといわれている（那須1972）が、牛谷氏がいつ頃この地に移り住んだかは判然としない。現在の場所には貞享三年（1686）に移ったもので、当時は五十間四面、幅二間半の館堀を巡らせた大規模なものであったという。当時の屋敷の規模、建物の配置を知る手掛りとなる明治時代に描かれた絵図が牛谷家に伝わっている（図版2）。また館堀の掘削の際、鎌倉

時代末期の作といわれる板碑が出土している。これは、現在牛谷家屋敷地北東隅の阿弥陀堂内に安置されているもので、高さ1m程の小形の板碑であるが、碑面に仏身のレリーフがある。大塚氏との関連が注目されよう。

その他牛谷家には貞享三年移住の際、大塚城の大手門を移築したといわれる長屋門が残されている（町指定文化財）。両袖の長屋は移築時の付加ともみられるが、門扉は、大手門か否かは別として大塚城の遺構を現代に伝える貴重な文化財と思われる。



第3図 林崎館之図（東置賜郡史より作成）

III 調査の経過

今回の発掘調査は、前記した遺跡詳細分布調査の結果をもとに、大塚城外郭牛谷館跡のうち、路線内にかかる540m²について実施した。現地調査は平成元年6月19日～6月30日まで延べ10日間実施し、同年10月2日に手掘りによる調査が困難なSE2について、重機を使用した立会調査を実施した。以下に現地調査の経過を略記する。

6月19日

現地事務所に資材等を搬入。午前11時から関係者出席のもとに歓迎式を行う。その後杭打ちに入り、東西10～14m、南北50mの調査区を設定、併せて調査区内の草刈りを行う。

6月20～26日

重機による表土剥ぎ取りに続き、スコップ・ジョレン等による面整理作業を実施する。

6月27～29日

27日に遺構検出作業を終了、遺構精査作業に入る。また記録作業も併行して行い、29日まで平面図終了、レベリング80%終了。

6月30日

10時に現地調査の説明会を開催。その後レベリングを終了、午後資材等の搬出を行う。

IV 調査の成果

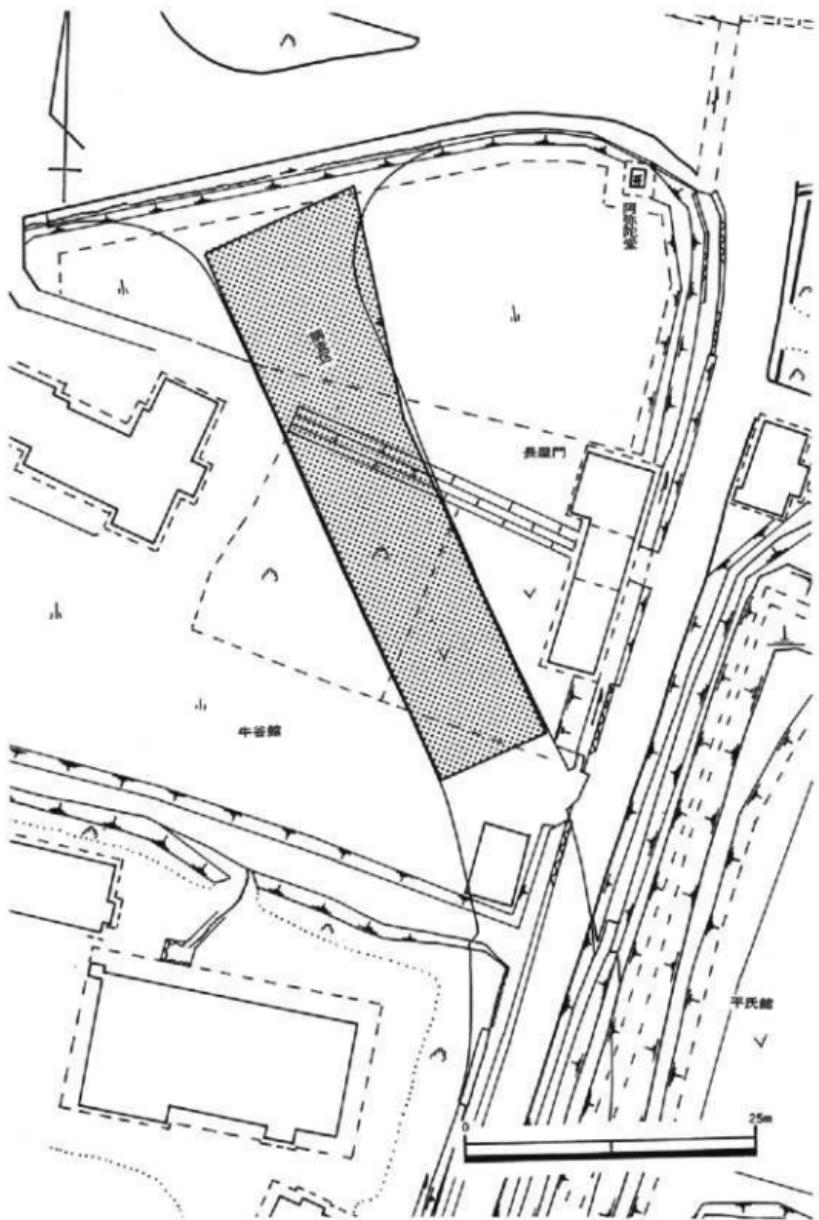
1 基本層序

遺跡詳細分布調査の結果からもある程度予測されていたことであるが、調査区内の層序は地点によりかなりのばらつきがある。Y-8区以北は水田となっていたため、表土黒褐色粘土質シルトが12～15cmの厚さで比較的安定して堆積する。一方Y-7区以南は庭園及び荒地となっており、特にC-1区付近では表土の層厚が1mに達する。また調査区中央付近は道路となっているため約7cmの表土上に5cm前後の厚さで砂が盛土されており、中央東側では表土が殆ど残っていない部分もある。

地山（遺構検出面）は、粘性が強く硬くしまった黄褐色粘土層である。調査区内ではほぼフラットに堆積するが、抜根、移築に伴う整地等が著しい。なお井戸跡の深掘りにより確認されたそれ以下の層序は、黄褐色粘土層下約60cmで黑色粘土が30～40cm堆積し、以下はグライ化した青灰色粘土が続くが、地表下2.8～3.4m付近で泥炭層をはさむ。地表下4mまでは疊層は存在しない。

2 遺構（第5図）

遺構は調査区内全域に分布する。検出された遺構は溝跡、井戸跡、建物跡、土壤の他、



第4図 遺跡概要図

多数の小ビット群がある。これらの中には、昭和中頃まで存在し牛谷氏の記憶に残っているものもあり、「牛谷家略絵図」と氏の談話から調査区内には穴藏跡（SK 5）・蔵跡（SB 4）・雪隠跡（A・B-8区を中心としたかく乱部分？）などの近世～現代の遺構が確認された。以下主な遺構を概述する。

SD 1 (第5図)

A・B-5～7区において検出された溝跡である。西北西～東南東方向に直進し、幅50cm前後、確認面からの深さ4～18cmをはかり立上りは急である。覆土は黒褐色粘土シルトの単一層であり、覆土内より縄文土器、中世陶器が出土したが近世～近代の陶磁器が主流を占める。おそらくこの時期に掘削されたと思われるが牛谷家との関連は不明である。

SE 2 (第6図)

A-6区において検出された井戸跡である。直径2mのやや歪んだ円形プランをもつ。開口部は緩やかに傾斜するが30cm以下ではほぼ垂直に掘り抜かれている。立会調査の結果確認面からの深さ3.8m、底径60cm、覆土は4層が底部までグライ化しながら堆積する。遺物の出土は皆無である。

SE 3 (第6図)

B-4区において検出された井戸跡である。直径116～128cmの若干東西に長い楕円形の平面プランをもつ。ほぼ垂直に掘り抜かれるが西壁の傾斜が若干緩やかである。確認面からの深さ3.2mをはかる。出土遺物は皆無であるがSB 4以前の遺構と考えられる。

SB 4 (第5図)

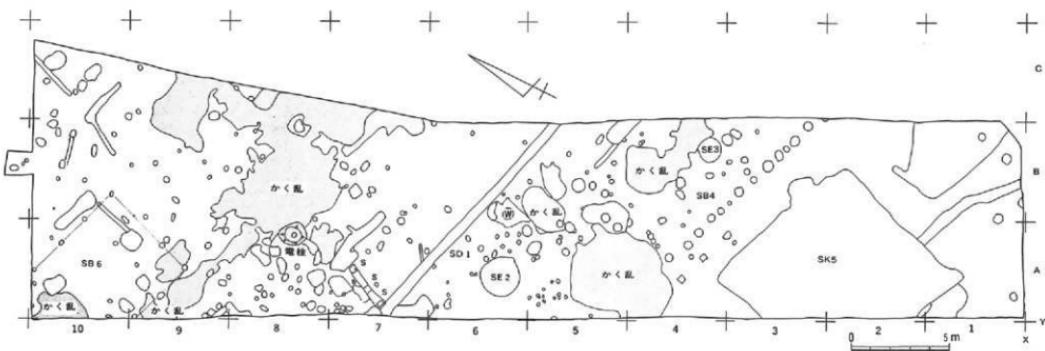
A・B-3・4区で検出された建物跡である。昭和中頃に取り壊した蔵跡である。一直線に並ぶ14基のビット（礎石抜取痕）と、入口部分とみられる2基の礎石を確認しているが西側及び北側は著しく攪乱されており、具体的な平面プランを把握するには至らなかった。

SB 6 (第5図)

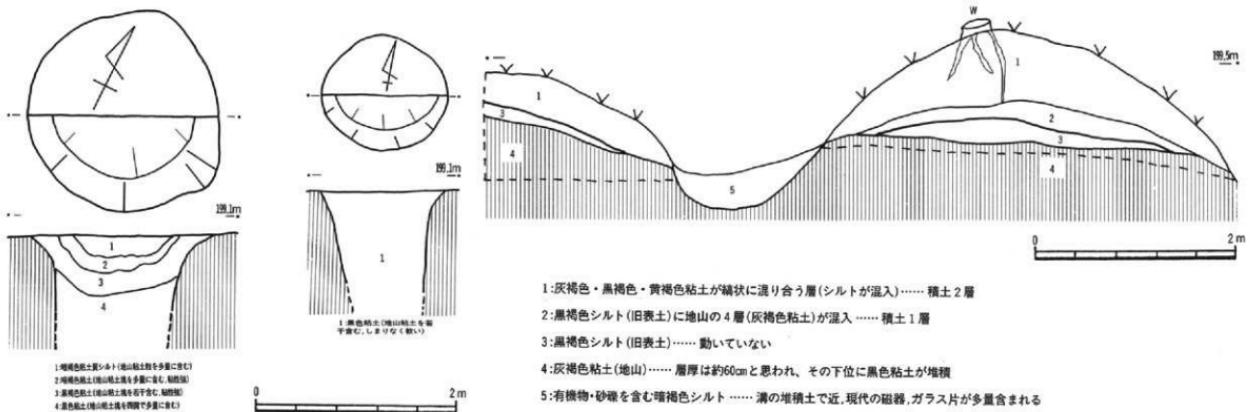
A・B-9・10区において検出された建物跡である。東西三間以上、南北三間の規模をもち柱間距離は東西1.8m、南北1.8m、2.1m、1.5mである。掘り方は20～40cmの円または楕円形でいずれもアタリは未検出である。確認面からの深さはいずれも10cm前後と浅い。牛谷家略絵図から馬屋の遺構ともみられるが母屋の付属施設としては構造が貧弱とも思われ検討をする。

平氏館跡土塁 (第6図)

前述の遺跡詳細分布調査の際に平氏館跡土塁の断面観察を実施した。この土塁は大塚城の時代まで遡れるか否かは不明であるが、土塁上の松の年輪は200年より古いことを物語っている。なお溝跡の覆土内から近・現代の陶器片・ガラス片が多量に出土している。



第5図 遺構配置図



第6図 SE2・SE3 井戸跡

第7図 平氏館土壘土層断面図

3 遺物

縄文土器 (第8図1・第9図6・図版5-1・2)

2点出土。第8図1は底部付近の破片で胴部無文、底部に網代痕をもつ。第9図6はSD1覆土から出土した。器面が荒れているが表面に細い燃糸文が施文される。

中世陶器 (第8図2・図版5-4a・4b)

SD1覆土内からの出土である。推定口径30cmをはかる珠洲系の鉢と考えられる。口縁端部が特徴的に内面に引き出されている。14世紀代の所産とみられる。

青磁 (第9図7・図版5-3a・3b)

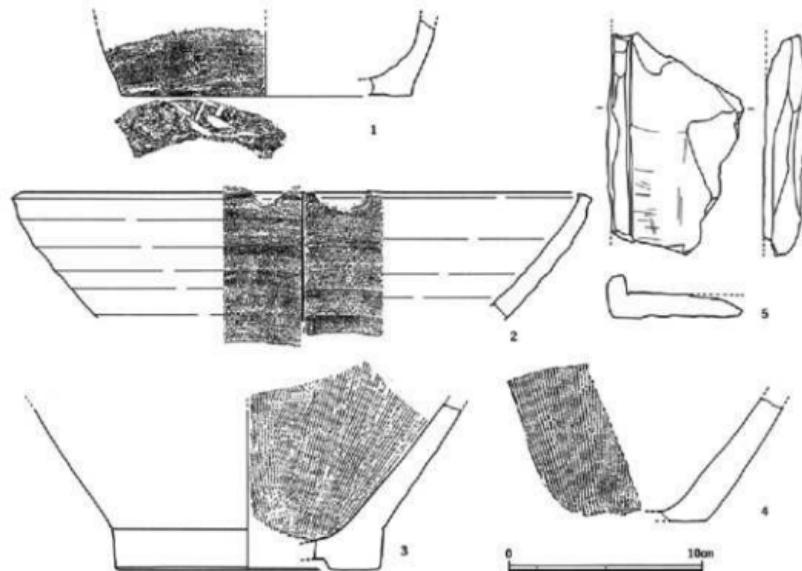
分布調査時に2トレンチ (B-7・8区) から出土した。中国明代龍泉窯系の青磁碗とみられ14-15世紀代のものと考えられる。

近世～現代陶磁器 (第8図2～4・図版5-7～29)

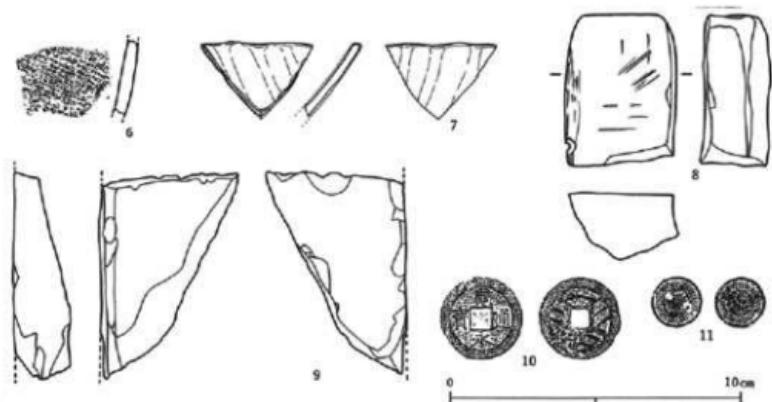
今回の調査で最も多く出土した。器種のバリエーションも広く、かなりの時期差をもつものと思われる。特に染付は出土量、器種ともに豊富である。

その他 (第8図5・第9図8～11・図版5-5・6)

粘板岩製の硯2点 (第8図5・第9図9)、砥石1点 (第9図8)、寛永通宝、大正期の一錢硬貨 (第9図10・11) 等が出土している。



第8図 出土遺物(1)



第9図 出土遺物(2)

V 調査のまとめ

一般県道大塚米沢線道路改良工事に伴う平成元年度の大塚城跡の緊急発掘調査の結果を要約するとつぎのようになる。

- 1) 大塚城跡は山形県東置賜郡川西町大字大塚字町拾式1529他に所在し、最上川左岸の標高200m前後の河岸段丘上に立地する。遺跡面積約250,000m²のうち今回の発掘調査は、路線内にかかる大塚城外郭牛谷館跡540m²について実施し、近世～現代にかけての遺構、縄文～現代の遺物が検出された。
- 2) 検出された主な遺構は、近世の所産とみられる溝跡、井戸跡、ピット群の他、昭和中期に解体された穴蔵跡、蔵跡があり、明治期に描かれた「牛谷家略絵図」に記載されていない多くの遺構を検出した。
- 3) 出土遺物は、縄文時代～現代にかけて広い時期差をもっており、特に中世の遺物は大塚城創始に係るものとして、また近世、近代の遺物は牛谷館の年代を傍証するものとして貴重である。今後該期の出土遺物の検討が急務である。

[引用の参考文献]

- 川西町 (1979) : 「川西町史」上巻 PP374～378 川西町史編さん委員会
 (1939) : 「東置賜郡史」下巻 PP257・258・PP280・281
 那須信一 (1972) : 「大塚村史」 PP24・25・PP63～65
 伊藤邦弘 (1988) : 「大塚遺跡第1次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第121集
 伊藤邦弘 (1989) : 「大塚遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第139集

図 版



大塚城跡遠景(南から)



大塚城跡近景(北から)



大塚城跡土壘(西から)



牛谷館遠景(東から)



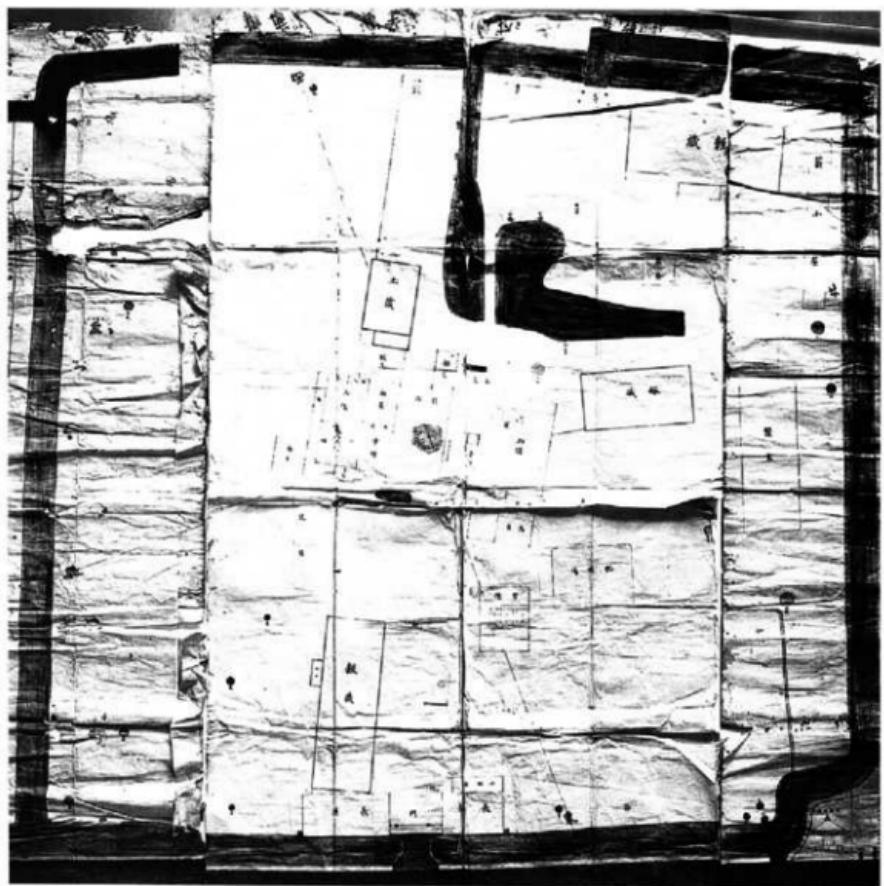
牛谷館近景(北東から)



牛谷家長屋門(北東から)



伝 旧大塚城門扉(東から)



牛谷家略絵図(牛谷佑二氏藏)



調査区全景(北から)



作業状況(南から)



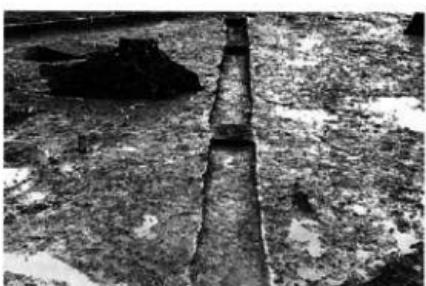
遺構検出状況(南から)



遺構検出状況(北から)



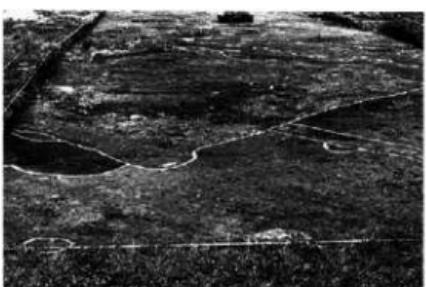
SDI検出状況(西から)



SDI精査状況(東から)



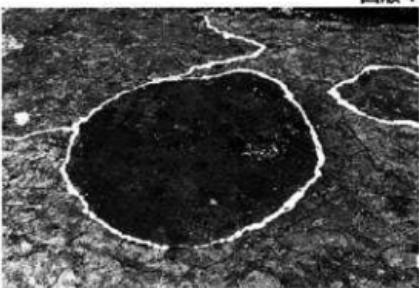
SB 4 検出状況(西から)



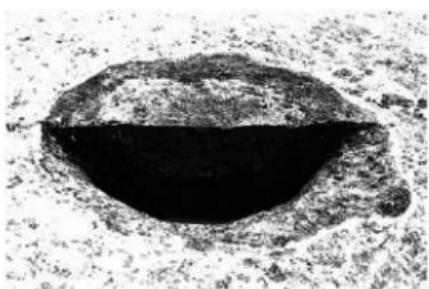
SK 5 検出状況(南から)



SE 2 検出状況(南から)



SE 3 検出状況(西から)



SE 2 土層断面(南から)



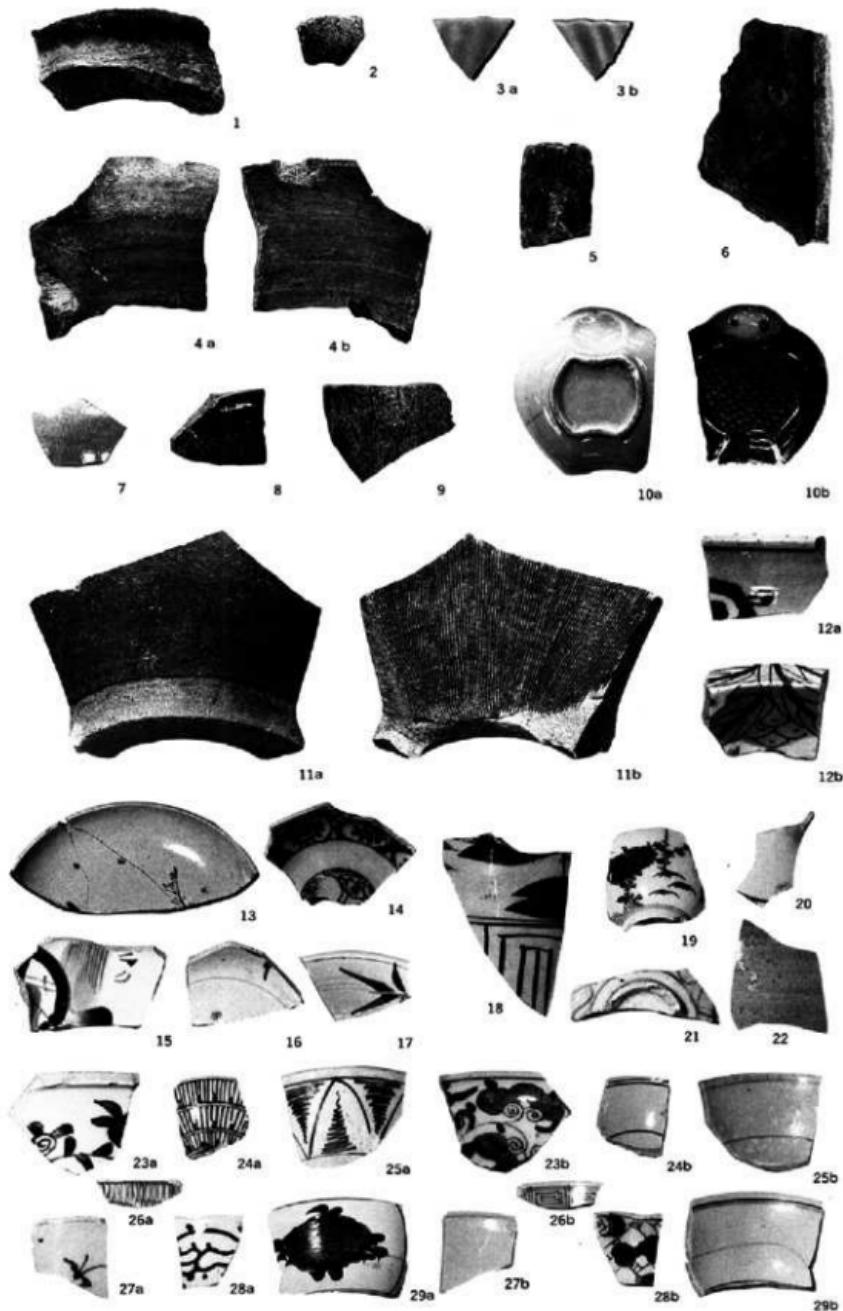
SE 3 土層断面(南から)



SE 2 深掘状況(南東から)



SE 3 深掘状況(南から)



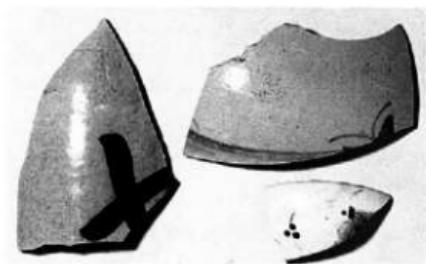
牛谷館出土遺物 (S=1:3)



平氏館近景(北西から)



平氏館土壘(南から)



平氏館出土遺物 1 (S= 1:3)



平氏館出土遺物 2 (S= 1:3)



平氏館土壘土層断面(西から)

山形県埋蔵文化財調査報告書第161集

おお つか じょう

**大塚城跡
発掘調査報告書**

平成2年3月15日 印刷
平成2年3月20日 発行

発行 山形県教育委員会
印刷 藤庄印刷株式会社
